

## 娯楽としての悪癖

### Bad Halbits as Entertainments

総括研究員：桂川光正

分担研究員：常松洋 藤原康晴 倉橋幸彦 藤永壮 村田好哉

研究初年度であるので、まずは各メンバーの関心がどこにあるのかを相互に確認し合い、それを通して、全体としての研究の方向性を探ることにした。

常松洋は、アメリカの禁酒法が失敗した背景を検討し、大量生産と未曾有の繁栄に裏打ちされた消費社会の出現に、さしあたっての答えを見出した。

藤原康晴は、解放後の上海で陳毅市長が行った売春撲滅政策について分析し、中国共産党、及び中国政府の売春制度廃止政策の分析への展望を述べた。

倉橋幸彦は、後藤朝太郎を通して、「支那通」ということばとその「支那通」が残した「喝・賭・娼」に関する記録について検討を加えた。

藤永壮は、朝鮮における日本型公娼制度の導入過程について、領事館・理事庁・朝鮮総督府の定めた法令を中心に検討した。

村田好哉は、1930年前後の浅草風俗を描いた川端康成『浅草紅団』の分析を通して、浅草モダニズムの特色と文化史における位置付けに関する考察を試みた。

桂川光正は、関東州・朝鮮・台湾における阿片制度を概観し地域ごとの差異を明らかにすると共に、近代東アジア研究における阿片問題研究の重要性を指摘した。

以上のように、各メンバーの関心領域は様々であり、アプローチの仕方も一様ではないが、それぞれの関心や問題意識に基づいて「近代」を追究しようとしていることが、改めて確認された。即ち、単に娯楽そのものを問題とするととどまらず、娯楽について様々な視点から考えることを通して、近代社会や近代文化の特質を明らかにすることが本研究会の活動の軸であることを、共通の認識とした。

もう少し時期を絞り込むこと、方法論を明確にすると同時にある程度の共通の理解を得ることなどが、来年度の課題として残っている。これらの課題に取り組みつつ、メンバーそれぞれの研究を進めていきたい。